

酒田市立資料館第188回企画展

吉野弘追悼展 酒田のうたー現代詩人の系譜ー

今年1月に亡くなった酒田市出身の詩人・吉野弘は、戦後の詩壇を代表する現代詩人です。作風はやさしく平明。「I was born」「祝婚歌」などの作品が、幅広い年代に愛され、国語の教科書の題材にも作品が取り上げられています。

戦後の現代詩は、敗戦という世の中の激変を体験した若者によって作られ、語られました。酒田の若者たちも、サークルを結成したり、中央の文芸誌に投稿するなど、熱心に詩作に取り組みます。吉野弘もそうした若者の一人でした。

吉野弘が残した作品と、戦後の酒田で詩人として歩んだ道のりを紹介するとともに、戦前から酒田の文化の担い手として活躍した佐藤十弥、同じく戦前から詩壇で名を知られながら、若くして亡くなった加藤千晴など、酒田の現代詩人の系譜をたどります。

展示にあたり、吉野氏のご遺族をはじめ、貴重な資料を提供いただいた皆様に厚く御礼申し上げます。

吉野 弘 年譜

- | | |
|-------------|---|
| 大正15年(1926) | 1月16日、酒田市で生まれる |
| 昭和13年(1938) | 酒田市琢成第二尋常小学校を総代で卒業 |
| 昭和17年(1942) | 酒田商業学校を戦時繰り上げ卒業 |
| 昭和18年(1943) | 帝国石油(株)に入社、酒田の山形鉱業所に勤務する |
| 昭和19年(1944) | 徴兵検査を受け合格(近視のため第一乙種) |
| 昭和20年(1945) | 山形歩兵第三十二連隊に入営予定だったが、5日前の15日に敗戦を迎える |
| 昭和24年(1949) | 過労で倒れ、肺結核のため3年間療養する。東京都江戸川区の片山病院入院中に、詩人・富岡啓二と親しくなり、詩作を始める |
| 昭和27年(1952) | 詩学社の詩誌「詩学」に「爪」「I was born」を投稿し、新人に推薦される。飯野喜美子と結婚し、光ヶ丘の社宅に住む |
| 昭和28年(1953) | 川崎洋・茨木のり子の同人詩誌「櫂」、酒田の同人詩誌「罨」に参加 |
| 昭和29年(1954) | 長女・奈々子誕生 |
| 昭和32年(1957) | 処女詩集『消息』を罨詩の会から刊行。新潟県柏崎市に転居 |
| 昭和33年(1958) | 石油資源開発(株)への移籍。東京都板橋区に転居 |
| 昭和34年(1959) | 詩集『幻・方法』を飯塚書店より刊行。 |
| 昭和37年(1962) | 二女・万奈誕生。退社しコピーライターに転職 |
| 昭和42年(1967) | 合唱組曲「心の四季」(高田三郎)を作詞、NHKで放送 |
| 昭和47年(1972) | 『感傷旅行』で第23回読売文学賞を受賞。埼玉県狭山市に転居 |
| 昭和51年(1976) | 母校・酒田市立琢成小学校の校歌を作詞。以後、校歌・社歌13編を作詞する |
| 昭和58年(1984) | 酒田市制50周年記念合唱組曲「風光歌」(服部公一作曲)を作詞 |
| 平成2年(1990) | 『自然渋滞』で、第5回詩歌文学賞を受賞 |
| 平成3年(1991) | べにばな国体の「国体賛歌」「炬火賛歌」を作詞 |
| 平成8年(1996) | 酒田市特別功労賞を受ける |
| 平成10年(1998) | 第41回埼玉文化賞(芸術部門)を受賞 |
| 平成19年(2007) | 静岡県富士市に転居 |
| 平成26年(2014) | 誕生日を翌日に控えた1月15日、肺炎のため逝去 |

酒田商業学校時代の吉野弘

琢成第二尋常小学校を総代として卒業した吉野弘は、酒田商業学校時代も優秀な成績を収め、特待生に選ばれた。当時の旧制中学の科目には「軍事教練」があり、陸軍少佐の教練を受けた。

昭和17年(1942)12月、戦時中のために繰り上げ卒業となり、帝国石油(株)に入社。同19年に徴兵検査を受け合格するが、近視のために第一乙種での合格だった。軍国少年だった吉野弘は、甲種合格を望んでいたため不本意だったと、自編年譜に記している。

帝石時代の吉野弘

昭和18年(1943)に帝国石油(株)に入社した吉野弘は、酒田にあった山形鉱業所の会計課に勤務した。昭和22年(1947)から労働組合の専従書記・専従役員になり、数次の首切り反対ストにかかわるなど、活動に専念していたが、その傍ら詩を書き始めていた。

妻・喜美子さんの話によると、社員に詩に親んでもらおうと、事務所の階段の踊り場に、吉野弘が選んだ詩(自作ではないらしい)を張り出したりしていたそうだ。

また、帝石の文化祭で上演した演劇の演出を担当し、慰安旅行のアルバムを編集するなど、詩以外の文化活動にも手腕を発揮していた。

戦後の「サークル誌」運動と吉野弘

吉野弘が詩を書き始めた昭和20年代後半、全国各地で、戦争を体験した若者による文化運動「サークル運動」が活発になった。当時盛んだった労働組合運動と重なり合いながら、職場や地域、結核患者の療養所などに多くのサークルができ、文学、音楽、演劇、美術など、さまざまな文化活動を行った。

こうしたサークルで、プロの詩人ではない普通の人たちが作った詩を「サークル誌」と呼んだ。反戦平和、民主化の推進、人間性の解放などをテーマにした、政治性・社会性の強い作品が多く、文学的な技術向上よりも、主張する内容に重きを置く傾向があった。

しかし、サークルに参加したすべての書き手が、自己の解放だけを目的に詩を書いていたわけではない。吉野弘は、労働組合の専従役員などを務め、労働者を題材にした詩を多く書いているが、サークル詩誌「罨」に参加する以前から、プロの詩人を目指して詩作に没頭し、中央の詩の専門誌「詩学」に投稿していた。

「罨」には、作品だけでなく、掲載作品の論評や、文学的な視点からの詩論などを積極的に発表している。

同人詩誌「權」への参加

詩人の登竜門だった専門詩誌「詩学」。吉野弘は、この詩誌に「I was born」が掲載されたことで、注目を集めた。

吉野弘と同じく、戦後を代表する現代詩人である茨木のり子、川崎洋も「詩学」に作品を投稿し、お互いの存在を知るようになった。

昭和28年(1953)、茨木のり子、川崎洋は同人詩誌「權」を立ち上げ、二人に誘われた吉野弘も参加。ほかに、谷川俊太郎、大岡信、友竹辰(声楽家の友竹正則)などが同人となった。

昭和32年、吉野弘の第一詩集『消息』が出版されると、吉野が参加していた酒田のサークル誌「罨」で出版記念号を出したが、大岡、茨木、川崎らの吉野弘論も掲載された。

姪に贈った個人的な詩だった「祝婚歌」

結婚披露宴の祝辞の中で、数えきれないカップルたちに贈られてきた「祝婚歌」は、もともとは酒田に住む姪に贈ったメッセージである。昭和48年(1973)、都合がつかず、姪の結婚式に出席できなかったため、お祝いに書いたものだ。この時はまだ、祝婚歌というタイトルもついてい

なかった。

吉野弘はこの詩を、友人の詩人・川崎洋にも送った。当時、テレビドラマの仕事をしていた川崎は、「二人は夫婦」というドラマにこの詩を使用。俳優・森繁久弥が番組冒頭で朗読した。

放送後、詩に関する問い合わせがテレビ局に殺到。一気に全国に広がり、昭和52年(1977)に詩画集『風が吹くと』(サンリオ出版)に収録された。

作者が予期せぬ形で多くの人の心をとらえたことについて、吉野弘は『おしゃべりポエム 風の記憶』(SPOONの本)のインタビューで、祝婚歌は作詞家・作曲家が誰だと知らなくても、その歌が好きで歌ってくれている「民謡」のようなものだと言っている。

吉野弘が作詞した校歌・合唱曲

吉野弘が最初に作詞を手掛けた校歌は、昭和51年(1976)、母校の光ヶ丘小学校と琢成小学校が合併してできた、新しい琢成小学校の校歌である。当時の斎藤晴記校長にあてた手紙には、当初は鳥海山や最上川などの風土性にかかわりのないものを考えていたが、時間がたつと到底省くことのできない大きな要素であることが分かったこと、歌詞を考えている間は、いつも幼い生徒の顔が脳裏にあったことなどをつづっている。

その後、泉小学校、遊佐中学校の校歌などを作詞。合唱曲も手掛け、昭和58年(1983)には酒田市制50周年記念組曲「風光歌」、平成4年に開催された「べにばな国体」のために、「べにばな国体賛歌」「べにばな国体炬火賛歌」を作詞した。

教科書に採用された詩

分かりやすい言葉を使いながら、深い人生観をつづった吉野弘の作品は、中学・高校の国語の教科書などに採用されている。

山形県教育委員会の第5次教育振興計画では、自分を愛し、他人を愛する心を育てる教育を基本理念にしているが、吉野弘が長女・奈々子さんが生まれた時に作った「奈々子に」が大きな示唆を与えている。

吉野弘関連の展示資料

- ・「I was born」銅板額の写真(山形県立酒田光陵高等学校提供)
- ・「I was born」銘板除幕式の写真(山形県立酒田光陵高等学校提供)
- ・「I was born」が掲載された詩学(個人蔵)
- ・酒田商業学校第25回卒業記念アルバム(山形県立酒田光陵高等学校蔵)
- ・(株)帝国石油入社当時の写真(個人提供) ・昭和23年、帝石文化祭の写真(個人蔵)
- ・サークル詩誌「苧」(個人蔵) ・サークル詩誌「歩行群」の写真(山形県立図書館提供)
- ・詩誌「土曜日と詩人たち」コピー(個人蔵)
- ・同人詩誌「權」(個人蔵) ・權同人の写真(個人提供)
- ・「秋の」、「早春のバスの中で」直筆額(山形県立酒田光陵高等学校蔵)
- ・「酒田市立琢成小学校校歌」、「スキシップ」、「樹木」直筆額(酒田市立琢成小学校蔵)
- ・「祝婚歌」、「山が」、「みんな」直筆額(個人蔵)
- ・酒田市制50周年記念合唱組曲「風光歌」直筆の歌詞と楽譜(個人蔵)
- ・「祝婚歌」の原稿(個人蔵) ・第1詩集『消息』と消息出版記念会の写真(個人蔵)
- ・昭和22~24年頃に作った詩の合本(個人蔵)
- ・愛用の原稿用紙、手書きの名刺(個人蔵)
- ・著書『幻・方法』『10ワットの太陽』『感傷旅行』など(個人蔵)
- ・吉野弘の詩が掲載された中学校国語の教科書(酒田市学校教育課蔵)

酒田の現代詩人

戦前・戦後にわたり酒田の文化活動を牽引

佐藤 十弥

明治40年(1907)～昭和55年(1980)

伝馬町(現在の中町)に生まれる。琢成第二小学校を卒業後、酒田中学校(現酒田東高等学校)に第1回入学生として入学するが中退。

東京神田錦城中学(現錦城学園高等学校)を卒業し、法政大学仏文科に入学するが中退。浅草エノケン一座で舞台装置を担当し、ベースボールマガジン社に勤めた後、帰郷し商業美術展、酒田演劇集団公演などの文化活動を始め。

昭和8年(1933)に再び上京し、同10年に帰郷。同人文芸誌『骨の木』を佐藤三郎、鈴木泰助らと発行。文芸活動、宣伝美術に専念する。

昭和30年(1955)、詩誌『緑館』を主宰発行。同32年から『みちのく豆本』の装丁を担当した。自著の詩集もたびたび出版している。

詩人、画家、デザイナーとして、酒田の出版文化、商業美術の世界に大きな足跡を残した。昭和52年(1977)に斎藤茂吉文化賞を、翌53年に酒田市政特別功労賞を受賞。

佐藤十弥と吉野弘

戦前から酒田の文化・文芸活動に中心にいた佐藤十弥と、戦後に詩を書き始めた吉野弘は、世代が大きく離れている。

二人に個人的な交流があったかは分からないが、吉野弘は、佐藤十弥が主宰した詩誌「緑館」に同人として参加している。また、昭和48年(1973)にみちのく豆本の会から出版された吉野弘の詩集『虹の足』の装丁は、佐藤十弥が手掛けており、詩を介してのつながりがあったのは確かである。

夭折した画家が残した詩

小野 幸吉

明治42年(1909)～昭和5年(1930)

二科展などに入選し、将来を嘱望されながら、21歳の若さで亡くなった画家・小野幸吉は、染屋小路(現在の本町)に生まれた。酒田中学校(現酒田東高等学校)を中退し、しばらく飛島など写生旅行した後、太平洋研究所で絵を学ぶ。昭和3年(1928)画家・林武に師事し、天才的と評されたという。小野幸吉は、生前、詩も書いていた。昭和55年(1980)に本間美術館で開催された「小野幸吉展」では、佐藤十弥が小野幸吉の残した詩を色紙に書き、展示した。

佐藤十弥らと文芸活動をともにした

鈴木泰助について

佐藤十弥、佐藤三郎らとともに『骨の木』を発行した鈴木泰助は、明治44年(1911)、北平田(現在は酒田市)牧曾根に生まれた。酒田中学校(現在の酒田東高等学校)卒業後、北平田産業組合の組合運動に尽力する一方、俳句などの文芸活動に励んだ。昭和14年(1939)、満州各地を視察する。帰国後に目を患い、新潟病院に入院。翌15年に失明する。昭和21年(1946)、36歳の若さで亡くなった。『詩のデッサン』は、入院中、病状が悪化する中で書かれた作品を、佐藤十弥がまとめたもの。ほかに、骨の木社から出版した『青句集』、画家・斎藤長三との共著『米づくり』がある。

佐藤十弥関連の展示資料

- ・文字絵「鍵」額（個人蔵） ・酒田市民芸術祭 20 周年記念特別作品『海』額（個人蔵）
- ・『火神水神』額（個人蔵） ・『かられる物語』（酒田市立光丘文庫蔵）
- ・佐藤十弥句集「鴉鼎嶺」（個人蔵） ・詩集「円なるもの」（個人蔵）
- ・みちのく豆本 吉野弘詩集『虹の足』（個人蔵） ・みちのく豆本『十弥カレンダー』
- ・『荘内文学』佐藤十弥追悼号（個人蔵）
- ・鈴木泰助小詩集『詩のデッサン』、骨の木別冊 鈴木泰助追悼号（酒田市立光丘文庫蔵）
- ・小野幸吉油彩画『ランプのある静物（C）』、小野幸吉の詩／佐藤十弥筆（本間美術館蔵）

失明と困窮の中でも詩作に励む

加藤 千晴

明治 37 年(1904)～昭和 26 年(1951)

酒田町利右衛門小路（現在の町 3 丁目）に生まれる。本名は平治。

青山学院高等学部（文科英文学専攻）在学中から詩作に興味を持つ。卒業後は京都の旧制第三高等学校（現京都大学）に勤務し、その傍ら詩作に励んだ。昭和 16 年(1941)、眼病のため退職。翌 17 年に第 1 詩集『宣告』を自費出版する。終戦後の昭和 21 年には第 2 詩集『観音』を出版。

昭和 22 年(1947)に酒田に戻り、失明と困窮のどん底にありながら、詩作や論文、手記の執筆を続けた。

没後の昭和 27 年(1952)、兄の加藤丈策（画家で、声楽家・加藤千恵の夫）が遺稿集『みちのく抄』を発行。昭和 50 年に孫の加藤千晶が『厭離庵そのほか』を発行した。平成 15 年には加藤千晴詩集刊行会（代表／石井上子・齋藤智）が『加藤千晴詩集』2 冊を発行している。

加藤千晴関連の展示資料

- ・詩「野に咲ける」の書／飯野恒心筆（個人蔵）
- ・第一詩集『宣告』（個人蔵） ・『観音』（個人蔵） ・『みちのく抄』（個人蔵）
- ・『厭離庵そのほか』（個人蔵） ・自筆詩集『浪漫詩集』（酒田市立光丘文庫蔵）
- ・加藤千晴油彩画 2 点 ・加藤千晴作「軍吉人形」

優れた作品を書きながら 37 歳で死去

大滝 安吉

昭和 2 年(1927)～同 40 年(1965)

酒田町下中町（現在の町）に生まれる。酒田中学校（現酒田東高等学校）、海軍経理学校を経て、昭和 21 年(1946)に東北大学法学部に入学するが、同 23 年、肺結核のために休学する。

療養中の昭和 25 年(1950)に、池田昭二らと同人詩誌「ら・ぶる一え」（霧）を発刊。酒田では戦後初の同人詩誌と思われる。昭和 26 年、本間診療所（現本間病院）の患者・療養者による同人誌「療養ニュース」に参加する。翌年、池田昭二の提唱でサークル詩誌「研」が発刊されると、2 号から参加。吉野弘、成田邦雄、菅谷規矩雄らとともに中軸となる。

昭和 29 年(1954)に、吉野弘の推薦で同人詩誌「權」に参加。「詩学」で新人推薦を受けるなど精力的に活動する。同 37 年には、一度終刊していた研を、吉野、菅谷らと復刊させた。

しかし、体調は安定せず入退院を繰り返し、37 歳で亡くなった。

昭和 41 年(1966)、吉野弘の編集により『大滝安吉詩集』が刊行された。

大滝安吉と吉野弘

昭和26年(1951)、本間診療所(現本間病院)に通院する療養者、回復者が、本間誠院長の援助を受けて、文芸誌『療養ニュース』を創刊した(後に『太陽』と改題)。

東京での1年半の療養を終えて酒田に戻り、職場に復帰したばかりの吉野弘は、この冊子の発起人の一人となり、自宅療養中の大滝安吉も参加した。

お互いの才能、詩にかける情熱を認め合った二人は親交を深める。ともに同人として参加したサークル詩誌「銚」では、中心メンバーとして活躍した。

吉野弘の自宅には、よく大滝安吉が訪れ(ときには酒瓶を下げて)、そこに銚のメンバーが加わって、談笑が深夜に及ぶこともしばしばだった。

吉野弘は『大滝安吉詩集』の「あとがき」に、「大滝さんの詩の美しさを“生きようとする意志の美しさ”だと思っている」「大滝さんの詩は、私にとって、まだ、あまりにも身近だ。第三者の眼を通して評価するということはできない位置にいる。(中略)素顔の大滝さんを紹介することが私の仕事だと思った」と思いをつづっている。

大滝安吉関連の展示資料

- ・『大滝安吉詩集』(個人蔵) ・大滝安吉詩篇詩論集『純白の意志』(個人蔵)
- ・『大滝安吉詩集拾遺－谷底の文字と青空と－』(個人蔵)

戦後・酒田の文化運動に幅広く貢献

太田 清蔵

大正13年(1923)～平成19年(2007)

旧櫛引町西片屋に生まれる。18歳から国鉄に勤務し酒田に移住する。

昭和30年(1960)、佐藤十弥が始めた詩誌「緑館」に、吉野弘、大滝安吉らとともに参加。同31年、国鉄労働組酒田支部に「歩行群詩話会」を立ち上げてサークル詩誌「歩行群」を主宰する。同33年に第一詩集『瘦躯の歌』を出版した。同年、「酒田市文学サークル協議会」が発足すると議長に選ばれ、長年「酒田市文化団体会議」事務局長を務めるなど、酒田の文化運動の担い手として活躍した。

昭和55年に国鉄を早期退職し、念願だった「ともえ画廊」を3年限定で経営。画廊内に、当時の小松写真印刷社長・佐藤孝、佐藤十弥、佐藤公太郎、佐藤三郎らとともに、文化人たちの集いの場として「沙論奴明」を設けた。こうしたメンバーで立ち上げた「本の会」の代表を務め、多くの郷土出版物を世に送り出した。

画廊を閉める直前に病気で倒れるが、入退院を繰り返す中でも、詩作は続けた。平成元年に酒田市民表彰を受けている。

太田清蔵と吉野弘

太田清蔵と吉野弘の出会いについては不明だが、昭和30年(1955)前後に同じ今町(現在は北今町)のすぐ近所に住んでいたこともあり、ひんぱんにお互いの家を行き来して作品交換などをしていた。

昭和30年に、ともに詩誌「緑館」に同人として参加しているが、それ以前の昭和28年には、吉野弘が参加していたサークル詩誌「銚」に、太田清蔵が特別寄稿している。早い時期からお互いのことを知っていたのではないだろうか。

吉野弘は昭和32年(1957)に新潟県柏崎市に、翌年には東京に転勤となり、その後、退社して詩人になったが、若いころから、東京に出てプロの詩人になることを切望していた。時期は定か

ではないが、太田清蔵に「一緒に東京に行かないか」と持ちかけている。

太田清蔵は酒田を離れなかったが、国鉄の労組活動や、詩以外のさまざまな文化活動を投げ出すことはできないこと、詩で食べていく踏ん切りがつかないことなどが理由だったようだ。

太田清蔵関連の展示資料

- ・ 第一詩集『瘦躯の歌』（個人蔵）
- ・ みちのく豆本 太田清蔵詩集『生理落果』（個人蔵）
- ・ 太田清蔵詩集『帽子の話』（個人蔵）
- ・ 詩「初列車」の書／佐藤十弥筆（個人蔵）

そのほかの展示資料

明治から戦前までの文芸誌など

- ・ 『荘内文学』、「木鐸」、「群像」、「骨の木」、樋口喜一小曲詩集『啞の小鳥』
(以上すべて酒田市立光丘文庫蔵)

現在酒田で活動している詩人の著書など

- ・ 詩誌『シテ』
- ・ 高瀬靖詩集『はららご』（個人蔵）
- ・ 早川孝子詩集『日曜日の条件』（個人蔵）
- ・ 阿蘇豊 詩集『ア』
- ・ 万里小路譲著『吉野弘 その転回視座の詩学』
- ・ 相蘇清太郎詩集『ルネサンスに至る神々』